原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第５集

原（はる）の辻（つじ）遺跡

幡鉾川流域総合整備計画（圃場整備事業）
に伴う緊急発掘調査報告書Ⅳ

1998

長崎県教育委員会

原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第５集

原（はる）の辻（つじ）遺跡

幡鉾川流域総合整備計画（圃場整備事業）
に伴う緊急発掘調査報告書Ⅳ

平成 9 年度原の辻遺跡（不條地区）調査区全景

床大引材出土状況

発刊にあたって

本書は，幡鉾川流域総合整備計画に係る県営圃場整備事業・溜池造成に伴って，平成９年度に実施した原の辻遺跡の緊急発掘調査報告書です。

この調査において，現在の幡鉾川本流にあたると思われる弥生時代以前から弥生時代中期後半にかけての旧河道が確認されました。この河道からは，日本最古の高床式建物の床材である床大引材（ゆかおおびきざい）が出土し，大陸から伝えられた当時の最先端技術による大型建造物が存在していたことが明らかになり話題となりました。他にも旧河道の中からおびただしい弥生土器とともに，朝鮮半島系の土器，各種の石器や木製品など貴重な遺物も出土しました。また，川が流れを換えた後にこの河道の跡は埋め立てられて耕地として利用された可能性があり，弥生時代の人々の土地利用に懸ける情熱が感じられます。

原の辻遺跡は，弥生時代の重要な遺跡として平成９年９月２日に国史跡の指定を受けました。この貴重な遺跡を後世に伝えることは，私たちの務めであります。現在，遺跡保存整備委員会において遺跡の保存と活用のための検討がなされていますが，地域住民の方々のご理解とご協力をいただきながら，文化財保護担当部局と開発部局との連絡調整を図っていくことも大切であると考えています。

今回の発掘調査の成果を文化財保護と学術的な資料として，活用していただければ幸いです。

平成10年３月31日

長崎県教育委員会教育長　中川　忠

例　　言

1．本書は，幡鉾川流域総合整備計画に係る県営圃場整備事業の溜池造成工事に伴って実施した，平成９年度の原の辻遺跡（不條地区）の緊急発掘調査報告書である。

2．調査地区の所在地は，長崎県壱岐郡芦辺町深江鶴亀触1117－１外である。

3．調査主体は長崎県教育委員会で，長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所が調査を担当した。

4．本書の編集と執筆は，杉原が行なった。

5．本書に関する出土遺物と図版及び写真類は，原の辻遺跡調査事務所に保管している。遺物の一部は，「壱岐・原の辻展示館」において展示保管する。

6．本書の作成は，原の辻遺跡調査事務所外業作業員と内業整理員の方々の協力によって作成することができた。ここに深く感謝いたします。

本文目次

1．調査概要……1

2．遺　構……1

3．遺　物……14

4．まとめ……18

挿図目次

第1図　宅畝島位置図……2
第2図　遺跡位置図……3
第3図　調査区位置図（1/8000）……4
第4図　弥生時代以前の旧河道（1/200）……7～8
第5図　弥生時代中期の旧河道（1/200）……9～10
第6図　旧河道及び線横断土層図……11～12
第7図　1号・2号土壙実測図（1/20）……13
第8図　床大引材実測図（1/15）……15
第9図　高床建築復元構造図……16

表目次

第1表　原の辻遺跡のこれまでの主な調査の経緯と成果……5

図版目次

図版1　平成9年度原の辻遺跡（不雲地区）調査区全景……23
図版2　旧河道横断土層東壁（弥生時代中期の河道北岸部分）……24
〃　旧河道横断土層東壁（弥生時代中期の河道南岸部分）……24
〃　竈全景（西より）……24
図版3　竈横断土層南壁……25
〃　2号溝・5号溝（東より）……25
〃　2号土壙（南より）……25
図版4　屋外炉跡（南より）……26
〃　木道状遺構（南より）……26
〃　洗場遺構（東より）……26
図版5　旧河道内遺物出土状況（C2区9層）……27
〃　旧河道内遺物出土状況（C2区9層）……27
〃　朝鮮系無文土器出土状況……27
図版6　朝鮮系無文土器出土状況……28
〃　朝鮮系無文土器出土状況……28
〃　出土朝鮮系無文土器……28
図版7　石鏃未製品出土状況……29
〃　出土石鏃……29
〃　石庖丁出土状況……29
図版8　出土石庖丁……30
〃　磨製石鏃出土状況……30
〃　出土磨製石鏃……30
図版9　出土蛤刃石斧……31
〃　出土石剣・石戈……31
〃　床大引材出土状況……31
図版10　床大引材出土状況（部分）（第8図B方向）……32
〃　床大引材出土状況（部分）（第8図A方向）……32
〃　床大引材出土状況（部分）（第8図C方向）……32
図版11　建築部材出土状況……33
〃　砧出土状況……33
〃　木製漆塗容器底部出土状況……33
図版12　木製蓋出土状況……34
〃　調査風景……34
〃　調査区遠景（南東より）……34

1．調査概要（第1図，第2図，第3図，第1表）

幡鉾川流域総合整備計画，県営圃場整備事業によって当該地区に溜池造成の計画がなされ，平成8年4月22日～6月11日に芦辺町教育委員会が287㎡について範囲確認調査を実施し，旧河道などの弥生時代の遺構を確認した。その結果に基づいて県農林部局との協議を行ない，平成9年4月23日～平成10年1月19日に溜池計画予定地3,000㎡のうち2,400㎡を長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所係長宮崎貴夫，文化財保護主事杉原敦史，西信男が，600㎡を芦辺町教育委員会文化財指導員松永泰彦が担当して発掘調査を実施した。調査は，当該工事区域を20m方眼で区切り，東西軸を西からA区・B区・C区・D区，南北軸を1区・2区・3区の地区に分けて発掘を行なった。

なお，これまでの原の辻遺跡の主な調査の経緯と成果については，表にまとめたので参照されたい。

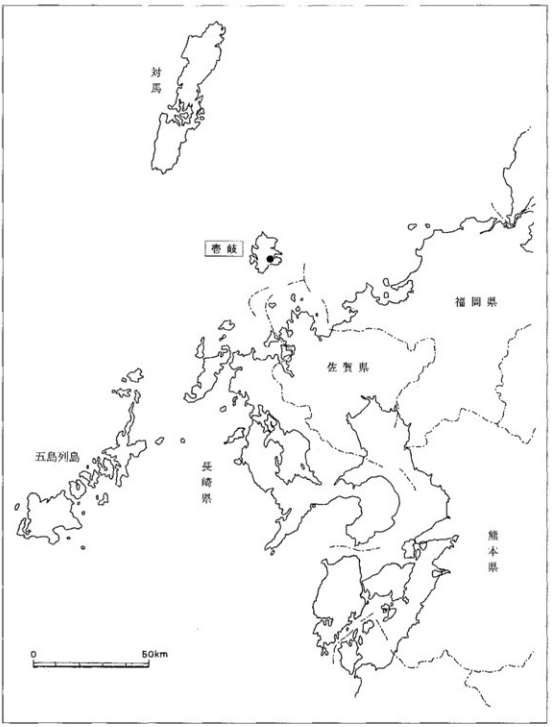
2．遺　構

(1) 旧河道（第4図，第5図，第6図，図版1，図版2）

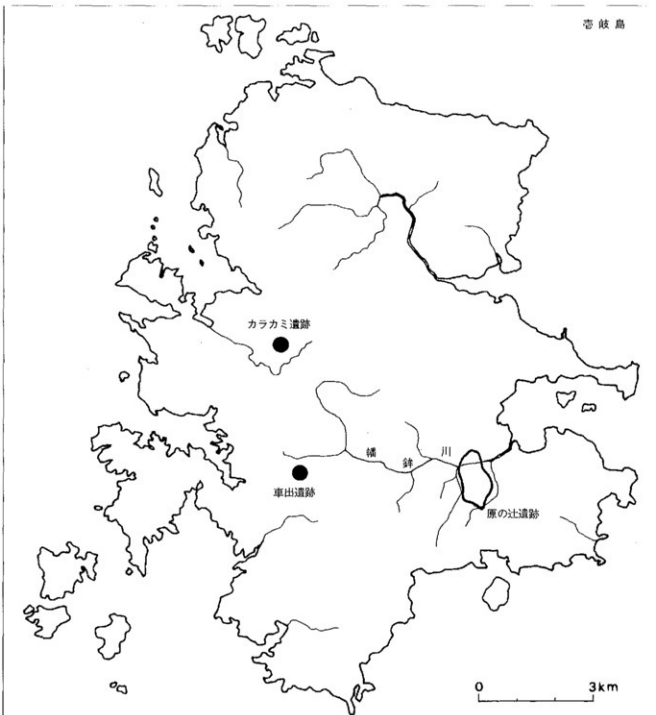
現在の幡鉾川本流に相当すると思われ，幅約20m，深さ約2m20cm，河床面海抜3m30cm前後で調査区を北西から東南にかけて弓形に曲る。弥生時代中期の以前と以降では曲る角度が違い，中期以前は調査区中央で90°近く曲るが，中期以降では緩やかな弧を描くように河道が換わっている。土層を観察すると，出土遺物から弥生時代中期（須玖Ⅰ式土器～須玖Ⅱ式土器古段階が中心）と考えられる9層の次の8層から上の各層は，同時期の両河岸にあたる12層の間に水平に堆積する。また，これらの層からは若干の土器片のほか石などの混入物は見られないため，弥生時代中期後葉に川は流れを換えてこの区を離れ低湿地となり，埋め立てられておそらくは耕地として利用されたのではないかと考えられる。土壌分析や植物の根跡からは水田ではなく畑地の可能性が大きい。なお，畦畔や畝は検出されなかった。弥生時代中期の河岸は，なだらかな立ち上がりを見せる南岸に対して北岸は人為的に切り立てられているが，調査区北東部の居住区防禦のためと考えられる。

(2) 濠（第5図，第6図，図版2，図版3）

調査区の北東部は，平成8年度の範囲確認調査により隣接地区から多数の柱穴や土壙が検出しており，居住区と考えられる。今回の調査でもそれに伴う遺構を検出した。しかしながら多くの遺構が昭和14年の幡鉾川河川改修に伴う圃場整備により削平されたものと思われる。濠は，日常は川排水路として利用されたであろうが，本来はこの居住地防禦のため掘られたものと考えられる。断面は逆台形状で上面幅約1m60cm，下面幅約1m，深さ約1m，本調査区においてはC1区～C2区にかけて長さ約9mが確認され河道につながる。底部のレベルはほぼ一定であるが，河道との合流地点9層には濠から河道中央方向に扇状に堆積した砂が確認されたので雨水や排水は河道に流出したと考えられる。また，河道との合流点に近接する部分は狭まり，河道からの逆流を防ぐための工夫をしている。土層の状況から見ると，最初は川が流れていた9層の時12a層を切り込んで掘られたが，その後河道跡が埋め立てられていく過程で12a層が削平され埋め土に利用されて濠は西岸を失い消滅した。しかし4b層が埋め立てられた後，居住区防禦の目的で再び同じ場所に掘り直されたと考えられる。なお濠内からは須玖Ⅱ式土器の古段階が出土した。



第1図　壱岐島位置図



第2図　遺跡位置図

第３図　調査区位置図（1/8000）（※調査区は網点部分）

調査・発見年度	発見者・調査主体	主　な　成　果
大正～昭和初期	松本友雄・山口麻太郎	学会への遺跡の紹介・報告。
昭和14年	鴇田忠正	幡鉾川改修に伴う耕地整理での調査。
昭和26～36年	九学会・東亜考古学会	住居跡，墓域の確認。卜骨，貨泉出土。原の辻上層式の設定。石器から鉄器へ転換した典型的遺跡の評価。
昭和29年	東亜考古学会	圃場整備で大原地区から細形銅剣２・銅戈１出土。
昭和49年	長崎県教育委員会	大原地区で，個人の基盤整備に伴って甕棺墓52・石棺墓19が発見され，戦国式銅剣１・トンボ玉など出土。
昭和51～52年	長崎県教育委員会	大川地区，原の久保Ａ地区，原の久保Ｂ地区などの墓域の発見。大川地区では，方格規矩鏡，有鉤銅釧など出土。遺跡が台地上に広域に拡がることを確認。
平成３～５年	県・芦辺・石田町教委	幡鉾川総合整備事業に伴う範囲確認調査。災害に伴う緊急調査。環濠の一部など発見される。
平成５年	県・芦辺・石田町教委	台地東縁で環濠，大溝が確認され，遺跡が大規模な多重環濠集落であることが判明する。各種の膨大な資料が出土する。
平成６年	県・芦辺町教委	原地区の高台部分で高床建物群を確認。高元地区で弥生中期～古墳時代初頭の住居跡13軒，土壙30基などが確認され，卜骨，獣帯鏡などが出土する。
平成７年	県・芦辺・石田町教委	原地区高台部分で弥生時代高床建物群と古墳時代初頭竪穴住居跡，濠２条など確認。大川地区の墓域調査。調査指導委員会で一支国の王都であることが特定される。
平成８年	県・芦辺・石田町教委	遺跡北側と西側の水田部分に弥生中期の居住域が拡がることが確認され，新たに濠や旧河道などが確認される。台地西側の八反地区で，船着き場跡と水田畦畔遺構が発見される。
平成９年	県・芦辺町教委	遺跡北東部の溜池予定地で，弥生時代中期の床大引材が発見される。

第１表　原の辻遺跡のこれまでの主な調査の経緯と成果

(3) 1 号 溝（第5図）

上面幅約1m20cm，下面幅約1m，深さ約20cmで調査区の南西端Ａ2区～Ａ3区で確認された。南西～北東に走り，北東方向に幅は狭まっていく。溝内より弥生土器小片が出土した。

(4) 2 号 溝（第6図，図版3）

上面幅約6m20cm，下面幅約1m50cm，深さ約1m30cmで底面のレベルは若干北東側に傾斜する。調査区西部Ａ2区～Ｃ2区を南東～北西に走り，北岸で5号溝南岸上部を切る。溝内より近世陶磁器が出土し，近世に掘られた用水路で昭和14年の圃場整備の際埋め立てられたと思われる。

(5) 3 号 溝

上面幅約1m80cm，下面幅約60cm，深さ約25cm～15cmで底面のレベルはほとんど一定している。Ｂ1区～Ｃ1区を北西～南東に走るが，Ｃ2区境で消滅するため自然の流路の可能性がある。溝内より明青花が出土した。

(6) 4 号 溝

Ｃ1区～Ｃ2区を3号溝と並行して北西～南東に走る。北部は近世の水田畦畔跡と接するため，なんらかの関係があるものと思われる。上面幅約1m40cm，下面幅約1m，深さ約7cmであるが南東に行くに従って幅を広げる。底面のレベルも南東に行くに従って下がっていく。溝内より近世陶磁器が出土した。

(7) 5 号 溝（第6図，図版3）

Ｂ2区～Ｃ3区を2号溝と並行して北西～南東に走り，南岸上部は2号溝に切られる。上面幅約3m50cm，下面幅約1m～1m80cm，深さ約1m40cmで底面のレベルは若干北東側に傾斜する。弥生時代中期の旧河道南岸を切りながら重複して走っている。中世の用水路と考えられ，溝内から土師質土器や李朝施釉陶器，馬の下顎骨などが出土した。

(8) 6 号 溝（第6図）

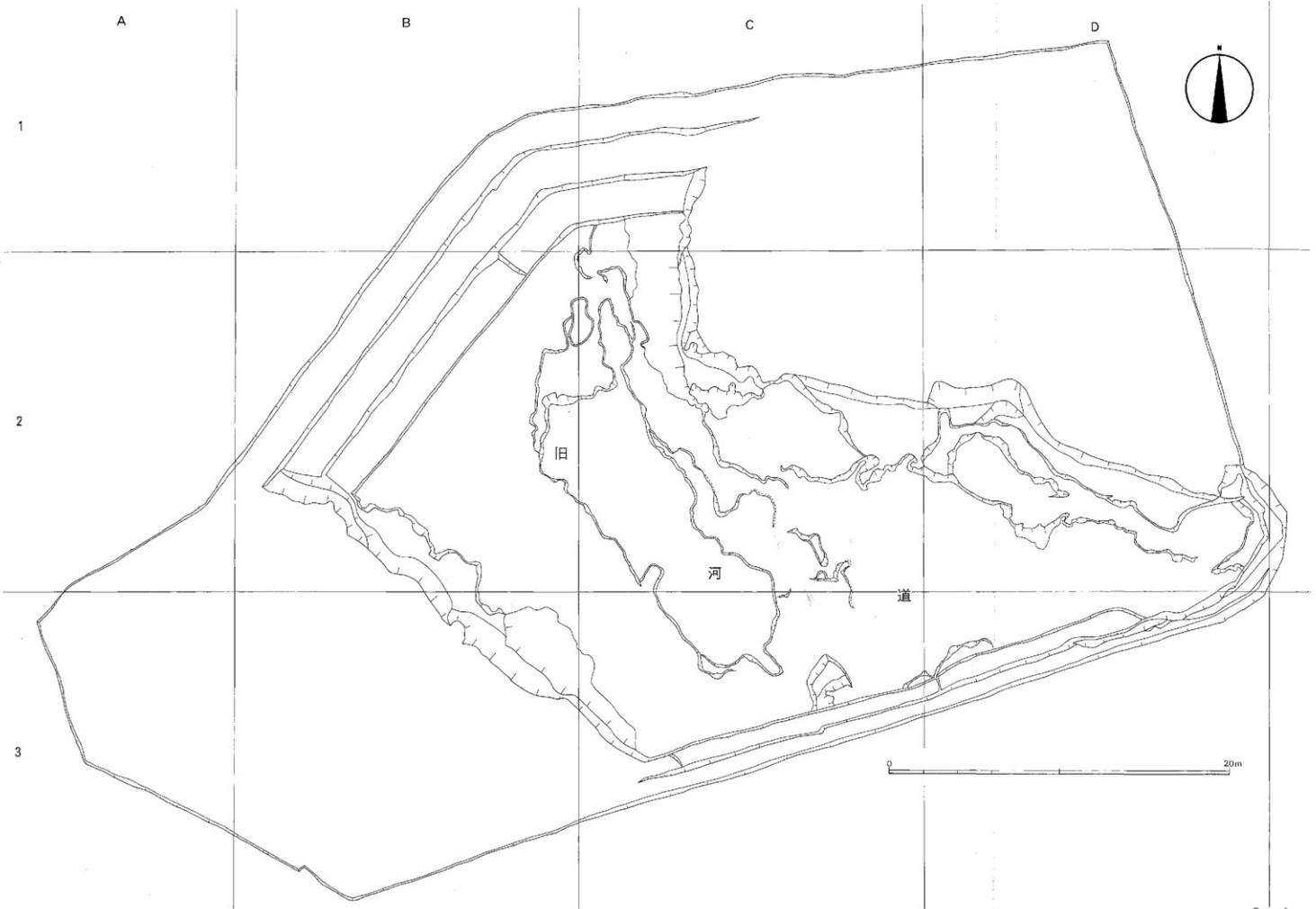
弥生時代中期の旧河道内，北岸に沿うようにＢ2区～Ｄ2区にかけて5・6層を切り込み検出された。非常に不安定な形状をとり人為的な跡は窺えない。濠との合流点付近では，濠にくいこむような形をとる。濠が掘り直された後に濠から流れ出た水が作った自然流路と考えられる。溝の北岸の濠との合流点付近に投げ込まれた形で須玖Ⅱ式土器の新段階が出土した。両岸から焼土も出土している。

(9) 1号土壙（第7図）

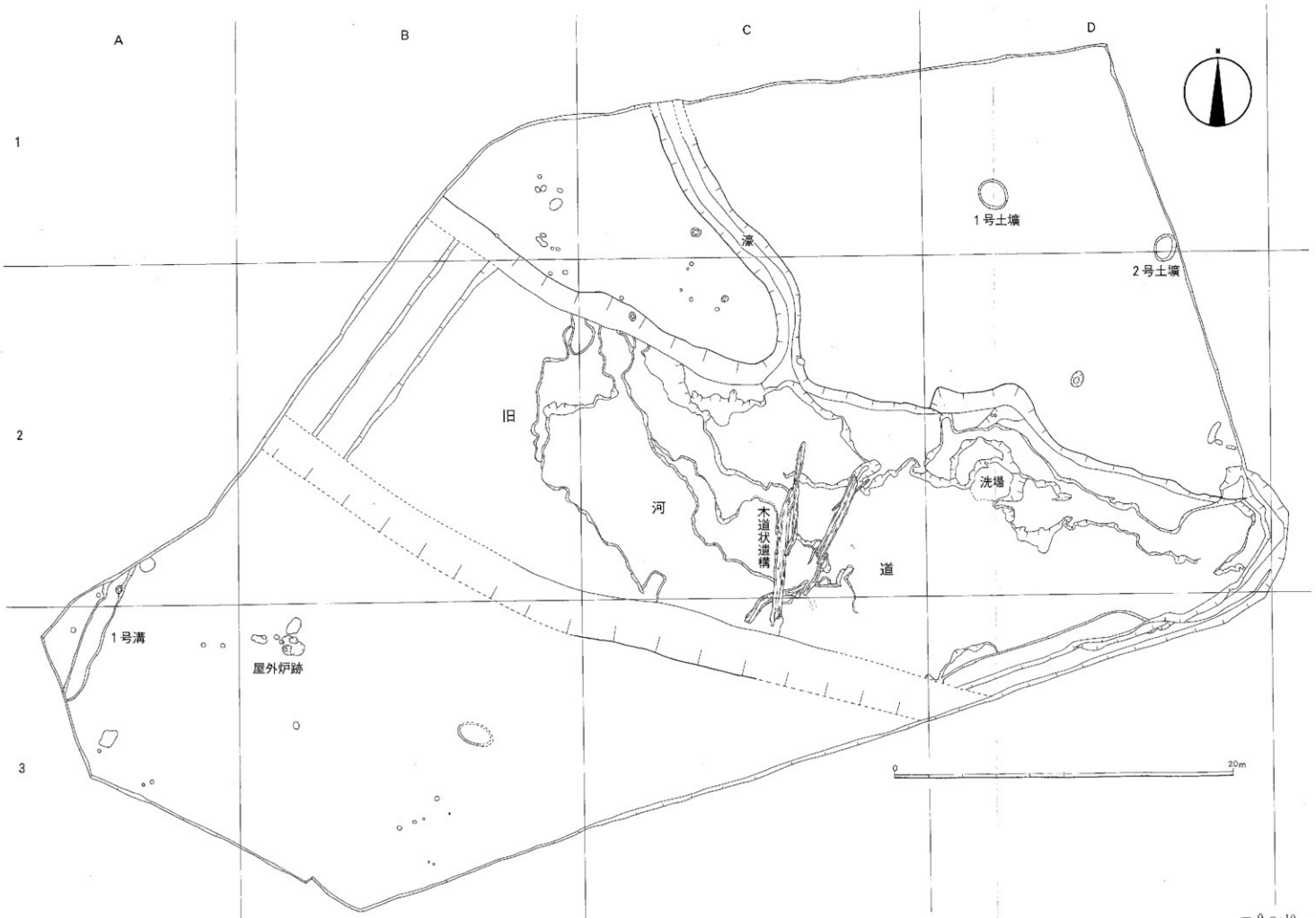
Ｄ1区に検出した，長径約1m80cm，短径約1m60cm，深さ約11cmの楕円形の土壙である。本来の姿の底部のみで，上部の大半が昭和14年の圃場整備によって失われている。覆土は褐色土一層で焼土と炭化物が含まれている。遺物出土は無かったが周囲の状況から弥生時代のごみ穴と考えられる。

(10) 2号土壙（第7図，図版3）

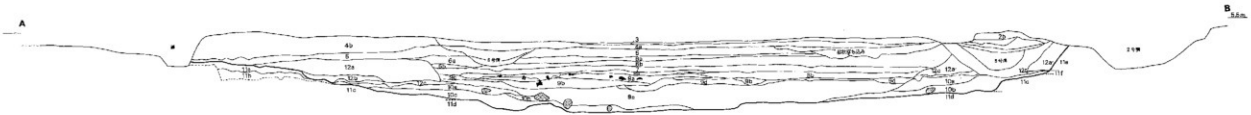
調査区の東端でＤ1区とＤ2区の境に検出した，長径約1m50cm，短径約1m30cm，深さ約10cmの楕円形の土壙である。1号土壙と同様に本来の姿の底部のみで，上部の大半が昭和14年の圃場整備によって失われている。覆土は黒褐色土一層で焼土と炭化物が含まれている。覆土から須玖Ⅰ式土器古



第4図　弥生時代以前の旧河道（1/200）



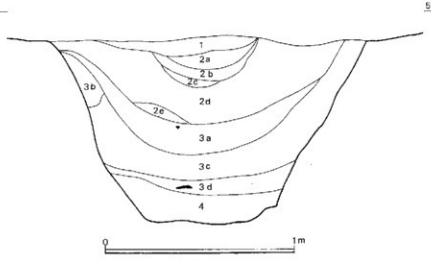
第5図　弥生時代中期の旧河道（1/200）



旧河道横断土層（1/120）

旧河道土層名

2b層　褐灰色粘質土層
3　層　暗赤灰色粘質土層
4a層　暗赤灰色土層（酸化マンガン多い）
4b層　褐色土層
5　層　赤灰色土層（上面酸化マンガン・鉄の集層）
6a層　灰褐色土層
6b層　暗灰褐色土層
7　層　灰オリーブ粘土層（すぐに酸化して明褐色に変化する）
8a層　褐灰色粘土層
8b層　炭化物・砂混じり褐灰色粘土層
9a層　橙色砂礫層
9b層　橙色砂礫混じり褐灰色粘土層
9c層　褐灰色粘土層
9d層　黒褐色泥炭・橙色砂混じり褐灰色粘土層
9e層　黒褐色泥炭・にぶい橙色砂礫・流木・暗灰色砂の互層
10a層　黒褐色泥炭質層
10b層　暗灰黄色砂層
10c層　黒色泥炭質層
11a層　明褐色土混じり黄灰色粘土層（地山）
11b層　灰黄褐色粘質土層（地山）
11c層　黄褐色砂質土層（地山）
11d層　黄褐色砂礫盤層（地山）
11e層　淡黄色粘土層（地山）
11f層　灰色粘土混じりオリーブ黒色泥炭層（地山）
12a層　明褐色土層
12b層　明褐色土層（下部には黄灰色粘質土が混じる）
12c層　灰色粘土層
12a'層　赤灰色粘土層（下部は酸化してにぶい橙色に変化）

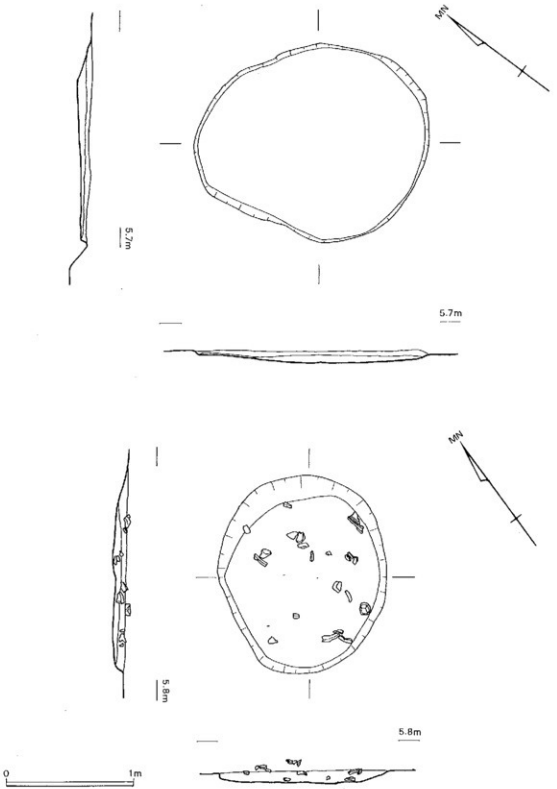


濠横断土層（1/20）

濠土層名

1　層　にぶい明褐色土層
2a層　黒褐色土層
2b層　にぶい淡褐色土層
2c層　焼土混じりにぶい淡褐色土層
2d層　にぶい褐色粘質土層
2e層　炭化物混じりにぶい褐色粘質土層
3a層　褐色粘質土層
3b層　浅黄色粘質土層（地山流れ込み）
3c層　暗褐色粘質土層
3d層　にぶい黄褐色粘質土層
4　層　にぶい黄橙色粘質土層

第8図　旧河道及び濠横断土層図



第7図　1号・2号土壙実測図（1/20）

段階・新段階の底部や口縁部が出土した。弥生時代のごみ穴と考えられる。

⑾ **屋外炉跡**（第５図，図版４）

長さ約２m，幅約１mでＢ３区で検出された。表面が赤く酸化した焼石を含む多数の大小様々な加工痕がない玄武岩と２層からなる長さ約１m，幅約50cm，厚さ１cm～７cmの炭化物，焼石片を中心とした焼土からなる。長さ約１m30cm，幅約１m，深さ約40cmの不整形な土壙と接しているが関連はないと思われる。石に混じって須玖Ⅱ式土器の底部が出土した。

⑿ **沼状落ち込み**（第６図）

Ｂ２区～Ｃ３区にかけて，弥生時代の旧河道南岸よりに５層～６層を切り込み確認された。古墳時代前期の典型的布留式土器（柳田康雄氏のいう土師器Ⅱｂ式）が出土した。５層が埋め立てられた後，４ｂ層が埋め立てられて溝が作られたが，その後しばらく旧河道跡の窪地は放置され，その間に自然的にこの沼状落ち込みができ，次の４ａ層が埋め立てられたのは古墳時代前期以降と考えられる。

⒀ **木道状遺構**（第５図，図版４）

Ｃ２区～Ｃ３区にまたがり９層の旧河道と灘の合流地点付近から検出した。長さ約11m，幅約60cmの自然木をそのまま利用している。弥生時代中期のある時点で河道が換わり旧河道が低湿地化した時，これを渡る通路として使用したと考えられる。

⒁ **洗場遺構**（第５図，図版４）

Ｄ２区旧河道北岸下場を幅約２m50cm深さ約20cmの半円形に削り込み，洗場としたものである。上場との登降川の梯子などを固定するため打った杭穴と考えられる２つのピットを伴う。調理に使った磨石や凹石，くぼ石（支脚型石器），貝殻や獣骨などの食料残滓が出土した。

⒂ **近世水田畦畔跡**

Ｃ１区とＤ２区で検出された。Ｃ１区では一部杭を伴うが手畔の，Ｄ２区では全体的に杭を伴う本格的水田畦畔跡が確認された。

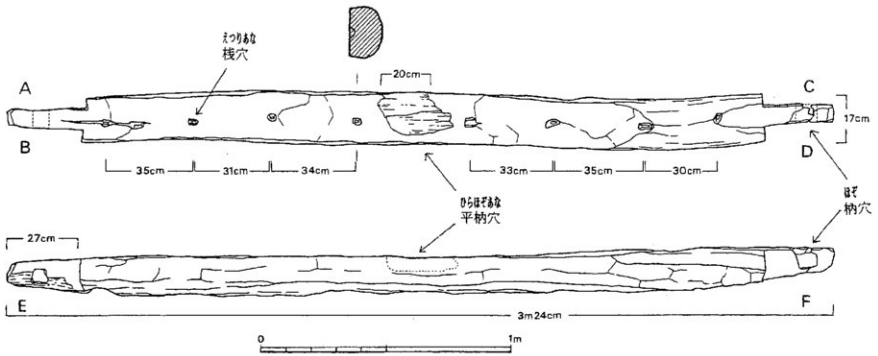
３．遺　　物（図版５）

今回の調査ではコンテナ350個分の遺物が出土したが，完形品はわずかでほとんどが破片として出土した。時折起こる増水により破壊されたものと思われる。なかには数10m離れて接合した土器片も発見されている。特に弥生時代中期の旧河道中９層の北岸付近には岸から投げ込まれて堆積したと考えられる，夥しい遺物が集中して出土した。北東部に居住区があったことを裏付けるものである。

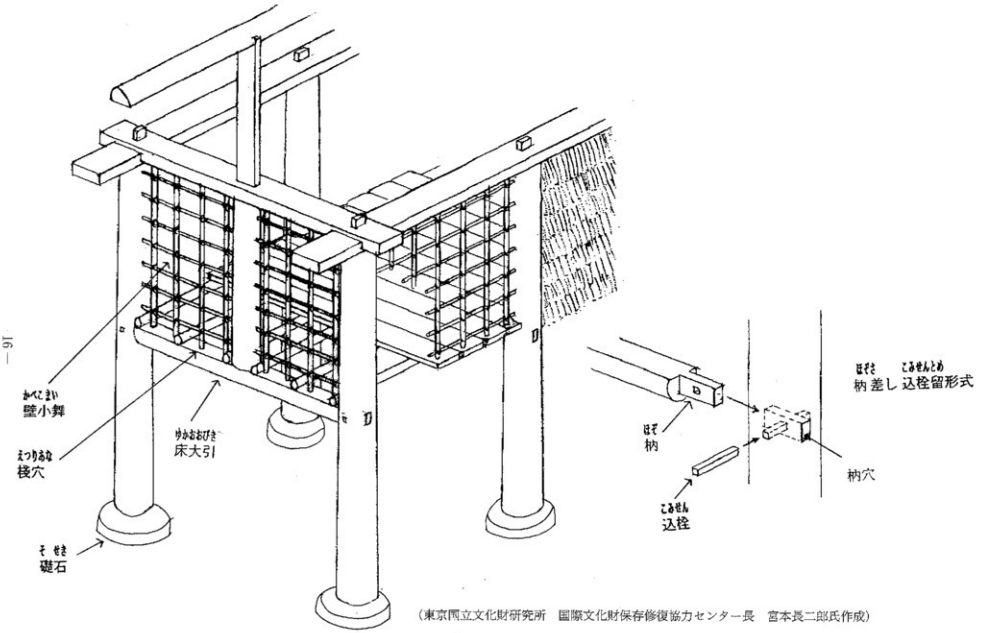
⑴ **土　　器**（図版５，図版６）

出土遺物中最も多かったのは弥生土器で，旧河道中９層だけで約94,600点が出土した。弥生時代前期末～中期末までの資料を含むが，中期の須玖Ⅰ式土器と須玖Ⅱ式土器が中心であり，居住区の居住期間を物語っている。他には流れ込みと考えられる縄文後期～晩期の土器片や，瀬戸内系土器も出土した。また，大陸との交渉を示す朝鮮系無文土器は112点も出土している。これは弥生時代中期の河道面積が約700m²であるから，10m²あたり１個の割合である。

⑵ **石　　器**（図版７～９）



第8図　床大引材実測図（1/15）



（東京国立文化財研究所　国際文化財保存修復協力センター長　宮本長二郎氏作成）

第 9 図　高床建築復元構造図

石鏃・石庖丁などの農具，蛤刃石斧・扁平片刃石斧・石錐などの工具，石剣・石戈・磨製石鏃などの武器，磨石や凹石などの調理具のほか，漁撈具として石錘が出土している。石鏃は未製品も出土しているため当地で作られていたと考えられるが，素材である頁岩は壱岐島内では取れないため，他地から素材を搬入して加工したものと思われる。石庖丁は福岡県立岩産のものなども出土している。両者を量的に比べると石鏃の方が出土数は多い。蛤刃石斧は福岡県今山産のものも出土した。また，打製石鏃やナイフ型石器，碧玉製管玉・ガラス製管玉も出土している。

(3) **木製品**（第8図，第9図，図版9～12）

日本最古の高床式建築の床材である床大引材をはじめとする切り込みや枘穴を入れた建築部材や，杓子・槌型容器・案・舟形容器・砧・漆塗り木製品・やしの実容器・曲物などが出土した。

床大引材は，旧河道内9層の弥生時代中期の遺物に伴って完全な形で出土した。高床建築の床大引材としては日本で最初で最古の出土例である。全長3.24m，最大径20cmの丸太材を使用し，一側面を平坦に削り15～17cmの厚さにし，両端部に幅7cm，高さ9～13cm，長さ27cmの枘を作りだし，その中央部に約6cm角の小孔を持つ。平坦部の中央は腐蝕して穴が広くなっているが，もとの形状は幅6cm，長さ20cm，深さ6cmと推定される平枘穴があり，この枘穴の左右の材の中軸線上には，30～35cm間隔に各4個の小孔を対称的に配置している。

以上の形状より，この床大引材は両端を側柱に枘差しとして込栓で固定する工法をとる形式で，大引と柱を組んだまま立柱する建込み工法と考えられ，礎石をもつ建物に採用される可能性があり，これまでの弥生時代の高床建築の床支持形式にはない全く新しい形式である。これまでに同時代の高床建築は，柱穴の中に柱材を建てて建築（掘立柱）することが明らかになっているが，今回の発見により大引と柱を組んだまま立柱する工法があったことが判明し，弥生時代における大規模な建築の出現を可能にしたと思われ，当時の建築技術水準の高さを解明する上でも重要な発見である。なお現在のところは，礎石遺構の検出も礎石建物に伴う瓦の出土も確認されていない。

この床大引材は妻側面の部材であることが材上面の痕跡から明かである。桁行中柱間を架ぐ床大引は両端の枘を妻側と同形式とするが，上面には仕口がなく根太を受け上に板などの床材を敷く形式であったと考えられる。妻側面の床大引中央の半枘仕口は扉根形式が寄棟造のときは間柱であるが，切妻造の場合は棟持柱となる。建物の用途によって寄棟と切妻屋根を使い分けていたと考えられるが，切妻造として復元すると図のようになる。切妻造高床建物の棟持柱は妻側面から離れた独立棟持柱と，妻側面に接して立てる近接棟持柱とする例が認められるが遺構例は少なく，大多数の高床建築遺構は棟持柱を地上面からではなく高床面から立上げる形式と考えられ，弥生時代後期の床上棟持柱らしい部材も発見されているが，今回の発見でその存在が弥生時代中期に遡って確認された。

(4) **その他**

薬用の可能性があるさるのこしかけ数点，炭化米数10粒，土製投弾，土製紡錘車（紡錘車は石製や骨製のものも出土した）などが出土した。また，食料残滓として鮫の歯骨・猪の骨・魚骨・貝殻も若干出土している。

4．まとめ

弥生時代中期の旧河道の検出は，その検出自体も意義あるものであったが，河道が換わった後の窪地状の低湿地を人為的に埋め立てて耕地として利用した可能性が確認されたことは画期的な発見であった。原の辻遺跡では，平成８年度の緊急発掘調査において船着き場跡という大陸から伝えられた当時の最先端技術による大規模土木工事の遺構が検出されており，河道跡の埋立ては技術的には当然可能であったと言える。埋立ての目的は，「魏志倭人伝」に記されている「差有田地耕田猶不足食」という当時の「一支国」の状況から，耕地の拡大による食料増産であったことは推測に難くない。この耕地の種類については，水田より畑地の可能性が高い。出土石器が石庖丁（穂首刈り用，水稲収穫用）よりも石鎌（根元刈り用，麦類収穫用）が多いことも関係があると思われる。畑地であるとすれば，根跡の状況から新旧２段階の畑が考えられる。古段階が６ａ層を作土，６ｂ層と７層を下層土とするもの，新段階が５層上半を作土，５層下半を下層土とするものである。

また，土層や溝からは弥生時代中期から古墳時代前期に至る当地の社会状況を垣間見ることができた。濠は言うまでもなく本来防禦用の施設である。この濠が弥生時代中期に掘られ，一旦消滅され，再度掘り直されている。これは９層に濠から旧河道に流入した砂が確認され，時間を隔てて５層・６層に切り込む形で濠から流出した水により自然水路である６号溝ができており，その間の土層は濠からの干渉を受けていないことからも明白である。従前の居住区防禦から平和的安定状態，そして軍事的緊張状態という社会状況の変化を示すものと考えられる。その間の状況を土層から考察すると，８層から５層までの時代は順調に河道跡の埋立ては進んでいくが，５層の埋立て後変化が見られる。４ｂ層の埋立ての後再建された濠からの干渉の他も，旧河道南岸付近に５層・６層を切り込んで自然発生の沼状落ち込みができているのである。この沼状落ち込みからは，古墳時代前期の布留式土器が出土した。８層～５層までは９層と比べると少数ではあるが須玖Ⅱ式土器の古段階が出土する。つまり，弥生時代中期後葉順調だった埋立ては古墳時代前期まで一時中断し河道跡の窪地は放置されたため，沼状落ち込みができたと考えられる。これもまた濠の再建と係る軍事的緊張状態のなせる所と考えられる。原の辻遺跡においては，弥生時代前期末～後期初頭にかけて居住区は舌状台地周辺にも散在していたが後期初頭以降舌状台地上に集住する傾向にあることが，諸調査により出土する土器の年代確認作業によって徐々に明らかになりつつある。２世紀末のいわゆる「倭国乱」が原因であると考えられる。本調査区においても弥生時代中期末の須玖Ⅱ式土器新段階までで弥生時代後期の遺物は出土せず，濠の再建と係る軍事的緊張状態もまた同因と思われる。４ｂ層の埋立てもそれ以前とは趣を異にする。この層は河道跡を埋めるのではなく，居住区がある旧河道北岸，特になだらかになってしまった濠跡以西に行なわれている。緩慢になった窪地との段差を再びつけるため作った感がある。また，この層を埋立てたからこそ濠は再建できたのであり，このころ情勢が緊張してきたと考えられる。しかし，こうした努力にも係らず事態は悪化し弥生時代中期末に居住区は台地上に移り，再び平和が訪れた古墳時代前期以降に埋立ては再開され４ａ層が埋め立てられたものであろう。なお，濠が河道につながった状況で検出されたのは今回が初めてであった。

床大引材の出土は，平成８年度の船着き場跡の検出に続き原の辻遺跡に大陸から当時の最先端技術が伝えられ，礎石建築の可能性もある大型建造物が弥生時代中期に存在したことを明らかにした。現在のところ，礎石の検出や礎石建築に係る瓦の出土は確認されていないが，この発見は建築史上重要な発見であった。船着き場跡に近い場所からの発見であることも興味深い。

大陸との交渉を示すものとしては，112点に及ぶ朝鮮系無文土器の出土も意義深いものである。詳細については期を改めて紹介したいが，本調査区の近くに朝鮮半島の人々が多く住む地区があったことを窺わせるものである。このこともまた，近接地区ということで船着き場跡との関連性が考えられる。

以上が，平成９年度に実施した原の辻遺跡不慮地区の調査結果であるが，時間的制約や執筆者の力量不足もあり，分析も不充分で推察の域を出ない部分も多いが，いろいろな機会に今後補塡していきたい。

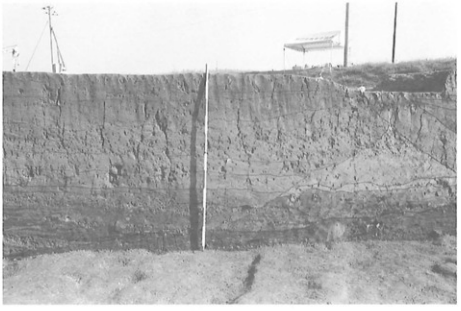
なお，旧河道内埋立て土層分析については奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター長　工楽善通氏，その土壌分析と植物の根跡分析については静岡大学名誉教授　加藤芳朗氏のご指導を頂いた。また，床大引材の分析は東京国立文化財研究所国際文化財保存修復協力センター長　宮本長二郎氏の見解によるものである。

図　　版

平成 9 年度原の辻遺跡（不條地区）調査区全景

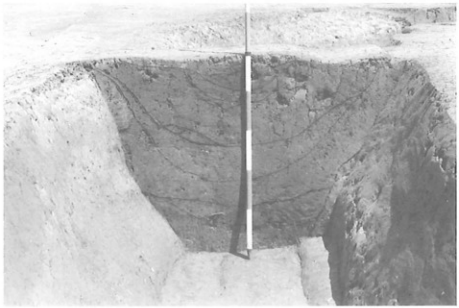
図版 2

旧河道横断土層東壁
（弥生時代中期の河道北岸部分）



旧河道横断土層東壁
（弥生時代中期の河道南岸部分）

濠全景（西より）



溝横断土層南壁

2 号溝(左)・5 号溝(右)(東より)

2 号土壙（南より）

図版 4

屋外炉跡（南より）

木道状遺構（南より）

洗場遺構（東より）

旧河道内遺物出土状況
（C 2 区 9 層）

旧河道内遺物出土状況
（C 2 区 9 層）

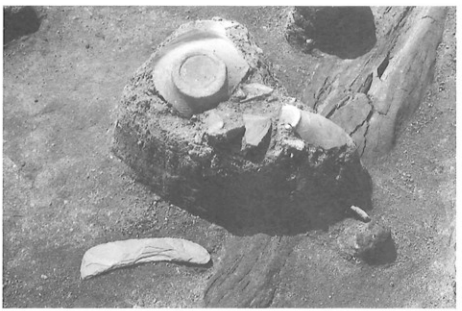
朝鮮系無文土器出土状況

図版 6

朝鮮系無文土器出土状況

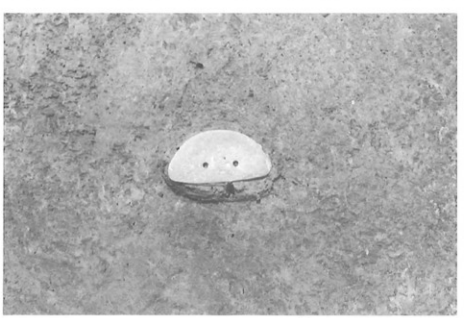
朝鮮系無文土器出土状況

出土朝鮮系無文土器

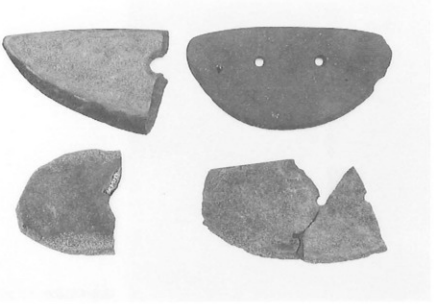


石鏃未製品出土状況

出土石鏃



石庖丁出土状況



出土石庖丁

磨製石鏃出土状況

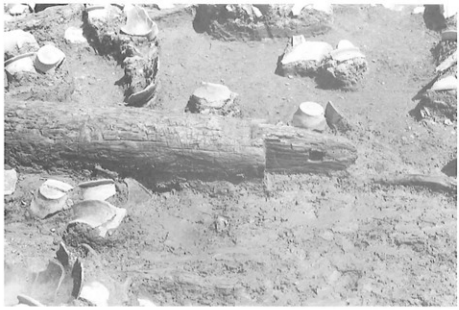
出土磨製石鏃

出土蛤刃石斧

出土石剣・石戈

床大引材出土状況

図版10



床大引材出土状況（部分）
（第８図Ｂ方向）

床大引材出土状況（部分）
（第８図Ａ方向）

床大引材出土状況（部分）
（第８図Ｃ方向）

建築部材出土状況

砧出土状況

木製漆塗容器底部出土状況

図版12

木製蓋出土状況

調査風景

調査区遠景（南東より）

報告書抄録

ふりがな	はるのつじいせき
書名	原の辻遺跡
副書名	幡鉾川流域総合整備計画（圃場整備事業）に伴う緊急発掘調査報告書
巻次	Ⅳ
シリーズ名	原の辻遺跡調査事務所調査報告書
シリーズ番号	第5集
編著者名	杉原敦史
編集機関	長崎県教育委員会
所在地	〒850—0861　長崎県長崎市江戸町2—13　TEL095（824）1111
発行年月日	西暦1998年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
原の辻遺跡 （はるのつじいせき）	長崎県壱岐郡 （ながさきけんいきぐん） 芦辺町深江鶴 （あしべちょうふかえつる） 亀触 （きぶれ）	42423	92	33°45′37″	129°44′57″	19970423 〜 19980119	3,000m²	圃場整備に伴う溜池造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
原の辻遺跡	集落遺跡	弥生時代	旧河道，濠，溝，土壙，屋外炉跡，洗い場遺構，木道状遺構	弥生時代の土器，石器，木製品	

原の辻遺跡調査事務所調査報告書第5集

原の辻遺跡

1998．3．31

発行　長崎県教育委員会
長崎市江戸町2番13号

印刷　株式会社　昭和堂印刷